

事典 イギリスの 民家と庭文化

英文学の背景を知る



三谷康之 著

まえがき (Preface)

一般に外国文学を研究したり翻訳したりする上では当然のことであるが、単に味読し鑑賞する場合ですら、その国の文化的背景に関する知識を必要とすることは論を俟たない。その主旨で本事典はイギリスの文学および文化の理解に必要な不可欠である広範な背景知識として、カントリー・ハウス(country house: 貴族などの館)以外の「民家」(house architecture)に限定し、「民家のタイプ」・「民家のデザイン」・「民家の庭」・「補遺としてコテージの画家など」を取り上げ、歴史・文化の観点から詳細な既述を試みたものである。

民家と、その周辺用語は多岐にわたる。それがさまざまな形で文学作品に登場するが、英和辞典は元より英々辞典にさえ掲載されていない場合が少なくないのが実情である。

ほんの一例だが、引用文を見れば分かることだが、数多の小説に実際のところ用いられている、'front garden'と'back garden'は、*OED*にもWebster辞典にすら、見出し語として取り扱われてはいない。ある英和辞典は本来の語義には触れずに、俗語の意味を説明している。

また、'garden[front] path'——イギリス人が大いにこだわりを抱く「庭^{にわみち}徑」——を作品中の登場人物が、玄関(front door)へ向かうか、それとも、通り(street)へ、即ち、表門[木戸](front gate)へ向かうかは、'up'と'down'によって区別される。そのことも、英和辞典には欠如している。日常生活で頻繁に使われる表現であるにも拘らずである。これも引用文を見れば分かる「例」ではある。

実際に「異文化」というものは、単なることばのみの説明では、なかなか釈然としないところが残るものである。そもそも風土や習慣の違いから我が国に存在しないものは、たとえ幾千語の文字で解説を試みたとしても、そのものの持つイメージを彷彿させ得るまでには至らない場合が少なくないからである。まさに、「隔靴搔痒」の感を覚えずに済まされ得ようか。

文学作品の中に、「家」(house)が作家によって持ち込まれると、「その家の造り」(house architecture)はどうか?、その「素材」(materials)はどうか?、「屋根」(roof)は「藁^{わら}葺き」(thatch)か?、「スレート」(slated roof)か?、「庭囲い」(garden

boundary)はどうか?、「表木戸」(garden gate)はどうか?、木戸から玄関へ通ずる「径」(garden walk)はどうか?、「車回し」(drive)はどうか?、「玄関ドア」(house-door)はどうか?、ドアの前の「踏段」(doorsteps)どうか?、などと拘った描写がなされている。

しかもまた、そのような建築用語の単なる語義の問題だけにとどまることでもない。

具体的に概略すると、「破風板」(bargeboard)の「妻壁」(gable end)に映る影模様も、重要な装飾要素のひとつに見做されるということだの、「庭径」も二人並んで歩ける程の幅約1.4mを理想としていることだの、その「径」の素材が、「家屋」や「庭囲い」に使われている素材と同一にするのが、伝統的であることだの、「表木戸」は「玄関ドア」や「窓枠」の色に合わせることを以て、本来とすることも知らねばならぬ。

そこで、上記の分野について、その文化史を詳説し、それに数多くの写真やイラストを添えた上で、詩・童謡・童話・小説・戯曲・エッセイ・紀行文など、実際の文学作品からの引用を示した事典の執筆を思い立った次第である。

しかしながら、著者は元より文学以外では門外漢である。従って、辞事典類も含めて、各分野を専門とする方々の著作を参考とする以外ほかに方法はなかった。ただし、ひとつの用語の説明にも、甲の著作に記されていないことが乙にはあり、乙の著作にも見られない内容が丙では述べられていて、また、丙でも触れられていない事柄が先の甲では指摘されている、といった具合であることから、本事典ではあくまでイギリスの文学および文化を理解する上で必要と思われる範囲内に限って、その「最小公倍数」を記述するように心がけたつもりである。

また、その引用文に付した和訳は、翻訳というよりはむしろコンテクストが把握できる程度の日本語訳にとどめてある。その際に、一例を挙げれば、我が国のように郵便配達人がモーターバイクか自転車に乗って、門柱辺りに取り付けられた「郵便箱」に、ただ差し込めば済む話とは違って、イギリスの「配達人」(postman)は、昔はサンタクローズのように白い大きな袋を担いで、現今では紺色のバッグを肩から吊して、徒歩で、一軒一軒の「表木戸」を開け、「庭径」を通して、「玄関ドア」設置された「郵便受け」(letterbox)の「穴」(slit)から、手紙類を中へ落として回らねばならぬという、時間と手間とを掛けることになる。家人の方も、落とされて床に散乱したものを拾い集める必要がある。その場合でも、引用

文の翻訳では、単に解説に用いた語をそのまま当て嵌めてある。それは、解説に示した語と一致させるために過ぎないもので、本書の引用文は、「見出し語である用語」の理解の補助を目的のひとつにしているためであるからである。

その他の点について、本事典の特色の概要を列記すると、以下の通りである。

- * 取り上げた項目【見出し語】の数は247を越え、その代用となる「名称」および解説の中の主要な「用語」を加えると、300余りに達する。
- * それぞれの項目の解説でも、例えば、目次の順序に従うと、'cottage'、'semi-detached house'、'terrace house'、'back-to-back'、'cottage garden'などは、特に精細な記述を心掛けた。
- * 異文化の解説では、どうしても「百聞は一見に如かず」という面があるため、573点に及ぶ写真・図版を掲載し、それぞれに撮影場所の名前などをキャプションとして入れた。
- * 但し、写真は「民家」を主としたが、例えば、'door furniture'などは、民家以外のそれも加えてある。
- * ひとつの項目の【見出し語】に写真・図版を添えたが、特に多数のそれらを用いた例は、'brick nogging' (16点)、'cottage' (15点)、'gable' (16点)、'house [cottage]-door & porch' (33点)、'roof' (18点)、'thatch' (17点)などである。
- * 見出し語として取り上げた用語が、実際の文学作品などに於いて如何に表現されているかを示すために、引用文を入れ、和訳も添えたが、その作家数は全部で114人で、作品数は234編に及ぶ。
- * その引用文については、【用例】【文例】と2種に分類した上で、特に重要な用語の場合は幾例も挙げて、その語法への留意を促す計らいとした。さらに、敢えて「和訳」を添えるほどの例文ではないが、用語が登場するシチュエーションや、その用語の前後の言い回しなどを示すだけにとどめて済む場合は、【参考】

として原文のみを入れて、研究者の便宜を計った。

* 「民家」並びに「民家の庭」の分野の用語は、文学作品には余りにも多く使われているため、解説文の下に示す以外は、巻末に「資料」として、見出し語と共に入れてある。

* 特に文学作品に最も頻繁に言及されているもの——引用文を収集して見て意外だったのは——例えば、目次の順序に従うと、'flat'、'apartment'、'lodging-house'、'row of houses'、'square'、'wattle and daub'、'roof'、'gable'、'slate roof'、'front door'、'back door'、'doorbell'、'door knocker'、'doorstep(s)'、'front garden'、'back garden'、'garden path'、'drive' などである。

* G. Gissingは*The Private Papers of Henry Ryecroft*の中で、イギリスへ外国から来た人に、見逃してはならないもののひとつに、'cottage garden'を数えている。そこで、H. Allinghamを初めとする 'cottage painter' の絵に描かれる「家屋」・「庭」——人物も「呼び売り商人」・「呼び売りの台詞」に限定——の解説を加えた。

* また、引用文は「見出し語」のそれだけにとどまらず、その解説文で触れた用語、例えば、「大見出し語」の 'cottage' では、'cottager'、'reed'、'rush' など、「小見出し語」の 'lodging(-)house' では、'digs'、'diggings'、'lodger'、'landlady' などのそれも示してある。

* 「庭」と「庭径」に関するイディオムも出来るだけ取り上げてある。

* 見出し語の配列は、通常の辞事典類のそれのように必ずしもなっていない。例えば、第III部では、'front garden' (前庭)が先で「大見出し語」、その後には 'back garden' (裏庭)が「中見出し語」となっている。従って、何かの用語を調べる場合には、「索引」を当たる方が望ましい。「引く事典」であると同時に、「読む事典」でもあるからである。

* ひとつの用語の解説に、他の用語を幾つも使わざる得ないために、クロス・レファレンスを密にしてある。

* 「英和辞典」や「和英辞典」に用例を示す際にも役立つ言い回しを、イギリス及びアメリカの多数の建築などの専門書の表現から活かし、用語の解説文の中に入れた。

* 見出し語の解説文や写真のキャプションの中で、その項目を説明する上でのキーワード及びそれに準ずる用語は、出来る限り日本語と共に原語も示すようにした。読者が後に他の解説書の原典に当たる際に、有益と考えるからである。1例を挙げれば、'thatching'を説明する際には、「東ねたわら」(yelms)、'the picturesque movement' の場合には、「リボン状開発」(ribbon development)、といった具合である。

本事典がイギリスの文学のみにとどまらず、その文化全般を理解する上での一助とでもなることが出来れば、著者としては望外の幸せとするものである。但し、L. スターンの『トリストラム・シャンディ』の中で、主人公がつくづくと述懐しているように——築城に関する用語だが——「こういう用語は専門の執筆家たちでさえ、とかく混同しがちなもの」('Writers themselves are too apt to confound these terms')なのである。ましてや、異国の風物・文化について書き記すとなると、思わぬ錯誤が残っていないとも限らない。何卒、大方のご叱正とご教示をこいねがうものである。

2020年8月13日

著者

凡 例 (Guide to the Encyclopaedia)

(1) 全体の構成について

(1)-1. 本事典は4部から成る。

第I部は「民家のタイプ」について、その種類の名称と特徴の解説。

第II部は「民家のデザイン」として、「木・石・レンガ・タイル」の素材に分けて詳述し、それに「屋根」と「戸口と玄関」と「ドア付属品」についても付加。

第III部は「民家の庭」として、「庭囲いと庭木戸」・「庭径」・「花壇」・「家庭菜園」に分けて、それぞれの種類の名称と特徴の詳述、およびその歴史的解説。それに「家番号」についても付加。

第IV部は「補遺」として、「コテージと呼ばれる民家独特の庭」・「コテージの画家と呼ばれるアーティスト」・「ピクチャレスク運動」の詳述、それに「コテージ・オルネ」についても付加し詳述。

(1)-2. 本事典の見出し語は、通常の辞事典類のような配列には必ずしもなっていないため、ひとつの用語を単に検索する場合は、先ず最初に「索引」を参照することが望ましい。全体の構成は、「引く事典」とすると同時に「通読する事典」ともなるよう配慮したからである。

(2) 見出し語について

(2)-1. 第I部～第IV部では、基本となる用語は「大見出し語」として扱い、黒地に白抜きで入れ、頭文字は大文字にしてある。

(例) **Terrace House**

(2)-2. 「大見出し語」に関連する項目は「中見出し語」として扱い、行の左端に入れて下線を引いてある。

(例) back-to-back

(2)-3. 「中見出し語」に関連する項目は「小見出し語」として扱い、行の左端に入

れて*印を頭に付してある。

(例) * tenement

(2)-4. 見出し語のつづりはイギリスの現行の辞事典を基本にしてあるが、引用文の中では実際の作品に用いられてあるつづりのままにしてある。従って、アメリカ英語は見出し語のつづりとは異なるが、そのままにしてある。

(3) 解説文について

(3)-1. 今解説している見出し語ではなく、別の「大中小の見出し語」の中で既に説明されたことは、「既述した～」としてあり、その用語を「索引」で検索することが可能である。今解説している見出し語ではなく、それと関連するためにその上の配列となる「大中小の見出し語」の中で既に説明されたことは「上述の～」としてあり、また、今解説している見出し語の説明文の中で、既に述べられたことは「上記の～」としてある。

(例) housing estate: 既述した 'detached house' や～

(例) black house: 上述の 'longhouse' の一種で～

(例) crescent: 上記のパーズには～

(4) 文学作品からの引用について

(4)-1. 見出し語の下には、文学作品からの引用例を挙げてある。

(4)-2. その際に、その用語にはどういう前置詞や動詞が使われるか、といった語法を中心として、比較的短い表現は【用例】とし、シチュエーションの中での使われ方を考慮し、比較的長い表現は【文例】として区別してあるが、必ずしも明確な基準に従って分類されたものではない。

(4)-3. (4)-2の場合、出典も示してあるが、【用例】では、作家の姓の名1字、作品名はその中の代表的1語(イタリックにもせず)のみにとどめたが、用例そのものよりも出典の記述が長くなることを避けるためである。正確には「巻末」の一覧表(「本事典に引用した作家と作品の一覧」)を参照されたい。

(例) T. Hardy: *The Hand of Ethelberta* (Hardy: Hand)

(4)-4. 引用文には原則として和訳を付したが、紙幅を考慮して、敢えて原文のみを単に資料として入れるに止めた場合は、【参考】の表示を付して、研

究者の便宜を計るものとした。

- (4)-5. 引用文では、解説した用語がどのように表現されているかを示すために、その部分に下線を付して留意を促す計らいにしてある。その際に敢えてイタリックを用いていない理由は、原文の中に元々イタリックの語句が含まれている場合があり、混同を招く恐れがあるからである。
- (4)-6. 引用した作品については、【文例】では単行本のタイトルの場合はイタリックで示し、単行本の中に収められている作品のタイトルは引用符で囲みである。また、それは全て巻末に一覧表としてまとめてある。
- (例) T. Hughes: *Tom Brown's Schooldays*
(例) G. Greene: 'Innocent'
- (4)-7. 見出し語として挙げたつづり字以外にも、解説文の中で言及したつづり字の【用例】や【文例】もあるが、それは解説文を参照されたい。

(5) その他の表記法について

- (5)-1. 見出し語その他の用語の発音には、難しい場合に限って、カタカナで表記してみた。英語学習者にはそれでおおよその見当がつくと思われるからである。その際、例えば、'stucco'の場合、「スタッコウ」となるが、最強アクセントは「タツ」に置かれることも示してある。比較的容易な語ではこの限りではない。
- (5)-2. 英語表現に用いた()は、語法上省略可能であることを示し、[]は前置された語と置換可能であることを示す。日本語の場合もこれに準ずるものとする。
- (例) escutcheon (plate); cruck cottage [house]
(例) オランダ(式)破風; 片流れ [差し掛け] 屋根
- (5)-3. 本文中の英単語の右肩に付してある * 印は、独立した見出し語として取り上げてあるか、あるいは他の項目の解説の中でも使われていることを示すもので、索引を利用すべき語であることを示す。
- (例) わらぶき屋根 (thatched roof*)
- (5)-4. 人名、その他の主要語は、ひとつの見出し語の解説文では初出の際に英語表記を付し、その後には日本語表記としてある。
- (5)-5. 写真やイラストのキャプションでも、上記(5)-4に準じてある。

- (5)-6. この種の辞事典類では、写真のキャプションに、所在地名を入れるのが通例であるので、それに倣い、名称の後に[E] [I] [S] [W]の記号を付してある。それぞれ、England、Ireland、Scotland、Wales を略したものである。
- (5)-7. また、地名では、本来定冠詞を付すものでも、誤解を招く恐れのない場合は、キャプションではそれを省略してある。
- (例) Aran Islands; Lake District
- (5)-8. ☞印は、参照すべき見出し語や項目、あるいは写真や図版を示す。
- (例) ☞ bed-sitter; ☞ 写真: 74
- (5)-9. キャプションで用いられる 'CU' の記号は 'close-up' (近接写真) の略語を示す。

Semi-detached House; Semi-detached

二戸建て住宅; 二戸連続住宅; 二軒一棟家屋

単に'semi' (その複数形は'semis')ともいう。また、'semidetached'のスペルも用いられる。

共通の側壁のみで(on only one common sidewall)仕切られてはいるが、2軒がそこで(=横壁で)接続して、2軒で1棟の住宅をいう。左右対称で、不慣れな目には、全体として1軒の外観を呈する家屋と映る。もっとも、2軒でそれぞれ外壁などを色違いのペンキで塗り分けたりしていることもある。

無論、玄関口(house-door*)などは各々に付き、裏庭(back garden*)も同様に、板塀(board fence*)やレンガ塀(brick wall*)などで、仕切り(garden boundary*)がなされてある。2階建て(two-storeyed house)が通例。

床面積は90~110㎡(27~33坪)が平均といったところで、間取り(position of the rooms)は、1階に、「居間」(sitting[living]room; lounge)、「食堂」(dining room)、「台所」(kitchen)、2階に、2~3室の「寝室」(bedroom)、「浴室」(bathroom: 通常トイレ付き)、がまた通例である。

後述する'terrace house'を、より狭く、よりプライバシー(privacy)を守られないとの理由から、嫌い、かといって、'detached house*' (一戸建て住宅)は経済的に無理という中流階級(middle class)が、比較的安価に求めることの出来る住宅として開発されたもので、当初は労働者階級(working class)などには、入手が困難であった。

19世紀に入るまでには、都市内から都市外、つまり、郊外(the suburbs)へと中流階級が移り住む傾向にあった。産業革命(the Industrial Revolution: 1760年頃~19世紀)が起こってからは、都市は人口増加が原因で、スラム街(slums)も増え、治安不安定と非衛生をもたらしたからである。

その時流に登場したのが、「セミ・ディタッチト・ハウス」である。伝統的建物のデザインをするには小さ過ぎる家屋を、二戸を連続して一棟にし、伝統的デザインを施した住宅にするための手段が講じられたのである。第一次世界大戦(1914-18)の後も、第二次世界大戦(1939-45)の後も、このタイプの住宅は増えて今日に

至る。その名称は19世紀の中葉に定着した。

ちなみに、ロンドンの人口流入を見てみると、1700年—約57万5千人、1800年—約98万人、1841年—約223万5千人と爆発的な増加である。

イギリスの住宅全体の内、このタイプは31%(1986年)、32%(1996年)という統計がある。

もうひとつちなみに、アメリカで'duplex'あるいは'duplex-house'といえば、2階建てで上下階が仕切られており、二世帯が別々になっている1棟の家屋(a two-family house)をいうが、このアメリカ英語を使って説明すれば、イギリスの「二戸建て住宅」というのは、'a side-by-side duplex(-house)'(横に接続した[仕切られた]二世帯住宅)ということが出来る。

【用例】

The semidetached houses, with a tin-roofed garage each'(それぞれにブリキ屋根のガレージが付いた二戸建て住宅) (D. Thomas: Who)/he walked up the gravel path to the large, semi-detached house'(彼は砂利を敷いた庭径を歩いて、その大きな二戸建て住宅へ向かった) (Wain: Hurry)/a dark-looking, semi-detached house of yellow brick, three storeys high'(黄色いレンガ造りの3階建てで、暗い感じの二戸建て住宅) (Orwell: Daughter)



16. stucco semi-detached house(化粧漆喰を塗った二戸建て住宅)。前庭(front garden*)はレンガ塀(brick wall*)で仕切られてある。Highgate, London[E]

【文例】

* Always the same. Long, long rows of little semi-detached houses....The stucco front, the creosoted gate, the privet hedge, the green front door.

—G. Orwell: *Coming Up for Air*

(いずれの場合でも同じ。長く、長く連なった小さな二戸建て住宅の家並...化粧漆喰を塗った家の正面、防腐用にクレオソートを塗った表木戸、イボタノキの生垣、緑のペンキを塗った玄関ドア。)



17. brick semi-detached house (レンガ造りの二戸建て住宅)。玄関口 (front door*) が隣接している点に留意。前庭の仕切りは板塀 (board fence*)。Dorchester, Dorset [E]



18. 二戸建て住宅。外壁と戸口は塗り分けられている点に留意。Milton Village (ミルトン村), Cambridgeshire [E]



19. 二戸建て住宅。ポーチ (porch*) が隣接しているタイプ。Brampton Village (ブランプトン村), Cambridgeshire [E]



20. 二戸建て住宅。玄関口は各々の中央にあるタイプ。Gothland Village (ゴウスランド村), N.Yorkshire [E]



21. 二戸建て住宅の裏庭 (back garden*)。板塀やら石塀 (stone wall*) やらで仕切られている。Portchester, Hampshire [E]

著者略歴

三谷 康之（みにたに・やすゆき）

1941年生まれ。埼玉大学教養学部イギリス文化課程卒業。成城学園高等学校教諭、東洋女子短期大学英語英文科教授を経て、2002～10年まで東洋学園大学現代経営学部教授。1975～76年まで私学連盟並びに成城学園在外研究にて、イギリス及びヨーロッパにてフィールド・ワーク。1994～95年まで東洋学園在外研究にて、ケンブリッジ大学客員研究員。

主要著書

<単著>

- 『事典 英文学の背景——住宅・教会・橋』（1991年、凱風社）
 - 『事典 英文学の背景——城廓・武具・騎士』（1992年、凱風社）
 - 『事典 英文学の背景——田園・自然』（1994年、凱風社）
 - 『イギリス観察学入門』（1996年、丸善ライブラリー）
 - 『イギリスの窓文化』（1996年、開文社出版）
 - 『童話の国イギリス』（1997年、PHP 研究所）
 - 『イギリスを語る映画』（2000年、スクリーンプレイ出版）
 - 『イギリス紅茶事典——文学にみる食文化』（2002年、日外アソシエーツ）
 - 『事典・イギリスの橋——英文学の背景としての橋と文化』（2004年、日外アソシエーツ）
 - 『イギリス「窓」事典——文学にみる窓文化』（2007年、日外アソシエーツ）
 - 『イギリスの城廓事典——英文学の背景を知る』（2013年、日外アソシエーツ）
 - 『イギリスの教会事典——英文学の背景を知る』（2017年、日外アソシエーツ）
 - 『イギリス中世武具事典——英文学の背景を知る』（2018年、日外アソシエーツ）
- ##### <共著>
- 『キープ——写真で見る英語百科』（1992年、研究社）
 - 『現代英米情報辞典』（2000年、研究社出版）

事典 イギリスの民家と庭文化

—英文学の背景を知る

2021年3月25日 第1刷発行

著 者／三谷康之

発 行 者／山下浩

発 行 行／日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

組版処理／有限公司デジタル工房

印刷・製本／株式会社平河工業社

装 丁／赤田麻衣子

©MITANI Yasuyuki 2021

不許複製・禁無断転載

<落丁・乱丁本はお取り替えます>

(中性紙三妻クリームエレガ使用)

ISBN978-4-8169-2871-0

Printed in Japan, 2021